C—72 法衣の構成研究（中正報）　—ビルマの袈裟について—

筑紫女学園短大　　保刈 禎子

目的　現在我国で袈裟と呼ぶものは，僧侶が仏法を説く場合の装束であり，各宗団の標識であって，全く装飾化され制服化されている。しかし，インドで仏教が始められた時点に於ては，「僧の三衣」と呼ばれて，比丘，比丘尼の衣服であった。現在でも「僧の三衣」と呼ばれて着用しているビルマ僧の法衣を調査することにより，袈裟本来の構成，縫製方法を推測する手がかりとしたい。

方法　門司市にある世界平和パゴダ僧院の　ウ・ウエーップラ大僧上及び他2名のビルマ僧達が着用している，三衣の構成・縫製・着装方法を調査し，指導を受けた。又市販されている布で実際に縫製した。

結果　(1)　サンガーティ saṅghāṭi　僧伽梨　ウッタラーサンガ uttarāsaṅga 鬱多羅僧　アンタラヴァーサカ antaravāsaka　安陀衣　の三衣があり，アンタラヴァーサカは下半身を覆う腰衣であり，ウッタラーサンガは巻着で偏袒右肩に着用し，サンガーティは外衣及び寝具として用いられている

(2)「パーリ律」「五分律」其他の諸律蔵に説かれた通りの「条数」「裁截」「作衣」「淨」が見られた。

ビルマ僧の袈裟は，古い仏典に託された袈裟の形態を今も存続している衣服であり平面構成衣の縫製を推測することが出来た。